

# 一般教養体育授業のバスケットボール競技について

## －ガイダンスとチーム分け－

小谷 究（成蹊大学非常勤講師）

大学における一般教養体育のバスケットボール競技の授業には、多様な学生が履修してくる。現在、体育会のバスケットボール部に所属している者から高校までの体育授業で行った程度の者など、経験が大きく異なる。また、バスケットボール競技はリングが3.05mの高さに床と水平に設置されているという競技特性から、身長が高い者が有利となるが、履修してくる学生の身長は様々である。さらに、専門体育や中学校、高等学校で主に実施されている男女別習型の授業とは異なり、大学における一般教養体育の授業の多くは男女共習型で行われる。このように、大学における一般教養体育のバスケットボール競技の授業では、経験、身長、性別の異なる多様な学生をチームに分け、ゲームを実施することとなる。

本発表では、多様な学生を対象としたチーム分けの方法、また発表者の授業におけるガイダンスの展開について紹介する。

## 協働する学生の育成を目指した授業運営

永田直也（慶應義塾大学体育研究所）

慶應義塾大学では、体育科目は選択科目として設置され、その中のひとつとしてバスケットボール種目が存在する。授業は、2名の専任教員・2名の非常勤講師が、1日3クラス×週5回の授業を実施している。内容や目的は教員で異なり、すべての技術レベルの学生を対象にしているクラス、初級者を対象にしているクラス等それぞれ特色がある。

発表者が担当するクラスでは、初級者を対象にした内容を行っている。授業では、バスケットボールが持つ「チームプレイ」、「身体接触等の触れあいがある」ことを活用し、履修者同士がコミュニケーションをとって協働するように授業運営を行っている。履修者の活動は、技術練習では教え合い等の協働が見られる一方で、ゲームにおいてはまだ不十分さを感じている。本発表では、ゲーム運営も含め、履修者が協働する授業運営について議論を深めていきたい。

## 一般大学におけるバスケットボール授業について

益川満治（専修大学・神奈川大学非常勤講師）

発表者が担当する、バスケットボール授業の達成目標及び授業内容は、試合において発揮できる基礎技能を習得し、応用技能及び戦術的理解を促し、より高いレベルのゲームを行うことである。授業内の問題点として、①技能レベルのバラつき、②履修人数の違い、③男女比の違い等があり、初心者から経験者まで様々な学生に対し、どのレベルに合わせた指導が有効なのか？初心者の基礎技能習得に向けた指導中心か？また、経験者の応用技能と戦術練習・ゲーム中心なのか？という問いを日々自問自答している。その中で、①運動量確保という観点、②学生の意欲から、ゲームの中での基礎技能習得は出来ないのか？と考え、個のレベルに着目した技術的なアプローチや基礎技能習得に向けた分解練習中心ではなく、集団のゲームレベルに注目し、戦術的アプローチとゲームの発達過程に基づいた介入的授業を行っている。本研究会では授業紹介と提案から議論を深めたい。

## 東京工科大学におけるバスケットボール授業の展開

神田 俊平（東京工科大学非常勤講師）

東京工科大学では、教職教養科目の1つとしてスポーツ実技Ⅰ・Ⅱを開講しており、その中のスポーツ種目の一つとしてバスケットボールが実施されている。

スポーツ実技の各授業では、スポーツ活動を通して、健康の保持増進に必要な体力の向上。また生涯にわたり、スポーツを楽しむ為にスポーツ種目の選択肢を広げ、自発的・主体的にスポーツを行うことのできる能力を育成し、仲間と協力し、競い合うことによってコミュニケーション能力を養うことをねらいとしている。

バスケットボールにおいては、基礎的な技術はもちろんのこと、バスケットボールの特徴でもあるシステムチックな戦術を用い、試合の内容に厚みが出るよう、そしてその運動量で基礎体力が大幅に向上できるように、頭と体を駆使して取り組むことを意識し、マッチ・トレーニング・マッチ形式をベースにした授業を展開している。また、ルール理解、生涯スポーツへの導入を目的とし、授業内における試合のタイムキーパー及び審判に関しては、学生がグループごとにローテーションで行っている。

なお、本発表においてはポイントごとに解説を入れながら、全15回の授業の流れを発表する予定である。

## 上智大学におけるバスケットボール授業の概要と今後の展望

飯田祥明（上智大学文学部保健体育研究室）

上智大学では全学部学生を対象としたバスケットボールの授業を開講している。受講する学生の競技レベルは、競技歴の長い学生からスポーツ経験がほぼ無い学生まで非常に幅が広い。さらに受講生の男女比はその学期によって大きくばらつくため、男女混合での授業運営を基本としている。

このような現状の中で私は「チームでイージーシュートを作れるようになる」ことを最終目標とし、授業を展開している。全15回の授業のうち、前半は基礎技術の習得、後半は固定したメンバーでのチーム作りが主な内容である。基礎技術に関しては特に「スムーズに良いシュートを打てるようになる」ことを目的に、チーム作りに関しては「自分達のチームに適した戦術を構築する」ことをテーマとしている。

今回の発表では授業全体の概要、使用しているドリル、授業内特別ルールなどを紹介する。また、グループワークシート、音楽、センサーボールの有効利用の可能性についても発表する予定である。

## 動きに対する考え方を植えつける

竹内 敦（芝浦工業大学非常勤講師）

バスケットボールは個人技術としてシュート・パス・ドリブルの3つが一般的にあげられる。3つの技術は試合を行う上で大変重要な要素である。しかし、試合中においてコート上にボールは1つであり、コートの中には敵味方合わせて10人のプレイヤーが存在する。つまり、10人のうち1人以外はボールを持っていないという事になる。ボールを保持していない人の動きは多種多様であり、特に制限は設けられておらず、ボールを保持しているプレイヤー同様大変重要である。

またバスケットボールの授業には高等学校まで課外活動などでやってきていない学生、いわゆる未経験者も多数履修してくることが予想される。未経験者からは「動き方がわからない」「何をしたらわからない」という意見が多く、その結果試合中に棒立ちになってしまう場合が考えられる。

以上を踏まえ、今回はボールを保持していない場合の考え方、動き方の指導法を中心に授業展開の1例を発表する。